

「思い出」

伊藤 啓子さん 87歳

昭和19年4月、私は、川西国民学校1年生になった。

祖母に祝ってもらった赤いランドセルは、ボール紙でできていた。

一年経たぬうちにふたはちぎれてしまった。

春の身体測定は近くの青物市場まで行って、パンツ一枚になってキャベツなどをはかる看貫秤にのって記録。私は、18kgだった。

春の遠足は、今も五月山の中腹に見える鳥居のある所。学校から歩いて橋を渡って登っていった。「おにぎりおとしなはんや。」と年のいった女の先生に注意されたが楽しかった。

ある日、教室に白いゴムボールが一つ配給された。先生は「くじびき。」とおっしゃった。

くじにあたった女の子の顔は、今も、はっきり覚えている。私はうらやましくてうらやましくてたまらなかった。

クラス中みんなそう思ったことだろう。

学校の前には文房具屋さんがあり、色づけされた*黍稗^{キビガラ}や色紙などが売られていたが、そんな物は買えなかった。

文鎮はセルロイドでできていて机をたたいたら破れてしまい中から砂が出てきた。

それを「たべろ。」といって、友達をいじめている男の子がいた。なぜか私は「やめとき」と言えなかった。1年生の時は、まだ授業中に空襲はなかった。

しかし、よく運動場をかけ足した。

1年生1クラス50人くらい8組まであって、それが6年生までだから全校 2,000 人余り。

あの広い運動場を列をなして走るのだから砂けむりがもうもう。目もあけてられなかった。私はぶかぶかの靴を履いていたので靴がぬげてしまって、あとはどうなったか覚えていない。履き物がなかった。みんな草鞋か下駄だった。

祖父が桜の生木で下駄を作ってくれたが、重くて重くて裸足の方がよかった。草鞋は、一日履いたら、もうあしたはぼろぼろで、履けない。戦後も、とにかく靴がなかった。

今、電車の中でみていると、老いも若きも、実にさまざまな色、デザインのおしゃれな靴をはいておられる。

当時のことを思うと涙がこぼれてしまう。

私は、今も「自省の鑑」と書かれた1年生の時の通知票を持っている。

「事をなすに慎重細心なり」と担任の先生が書いてくださっている。87歳になった私、歩く時は、このおことばをかみしめるようにありがたく思って守っている。

「ありがとう。」大塚好子先生。おわり

*黍稗(キビガラ)とは色彩を施したキビ・トウモロコシの茎の芯と細く割いたその皮